

## 大会講評

佐長 健司（全国教室ディベート連盟九州支部長）

大会講評として、3つのことを述べます。

第1は、これからもエネルギー環境問題について考え続けてほしいことです。今回の大会は、「日本は再生可能エネルギーを中心とする社会に早急にシフトすることが望ましい」という論題でした。ディベートの内容を振り返ると、肯定側は化石燃料や原子力発電等への依存から脱却して「安心・安全の確保」、「エネルギー自給率の向上」、「新しい産業の育成」等を実現するべきだと主張していました。一方、否定側は、一般的なディベートでは現状維持なのですが、今回は、肯定側の早急な転換に対して、時間をかけた転換という主張でした。また、肯定側が政府の積極的な政策による転換を主張するのに対して、否定側は市場に委ねるとする主張が多かったです。なぜなら、再生可能エネルギーへの転換にはコストを支払わなければならないからです。否定側の主張のように「電気料金の値上げ」、「停電の危険性」、「産業への悪影響」等が考えられます。早急に転換するならば、これらの問題は深刻になり、支払うべきコストが大きくなると否定側は主張します。こうして、再生可能エネルギーへの転換に対して、コストをどの程度まで支払うのかという判断が最大の論点になります。現実的には、これから専門家とともに国民（世論）が判断するのですが、みなさんも、今回のディベートの経験を生かして、これからもエネルギー環境問題について考え続けてほしいのです。

第2は、市民社会への参加ということです。ルールにおいて述べているパブリック・ディベートの趣旨、目的を思い起こしてください。ディベートの知識や経験のない一般の方々に理解できるもので、さらに現実社会の論争的なテーマを取り上げることになっています。このことからすれば、みなさんは2つの参加をしていることになります。1つはディベート大会への参加であり、もう1つは現実の市民社会への参加です。エネルギー環境問題は市民の誰もが考えなければならない問題であり、それをディベートによって議論しているのです。中学生、高校生であっても市民の1人としてこのような問題について議論することを通して、社会に参加していくのです。あまりにも当たり前すぎて見えないことなのですが、この会場の外にもたくさんの人々が、それぞれの立場でそれぞれの思いをもって活動し、互いに多様な関係を結び、支え合って社会が成立しています。みなさんも、これからの社会のあり方について考え、議論して、社会の形成に貢献する市民として成長しなければなりません。

第3は、他者とともに議論をつくることです。ディベートも単なるゲームでいいのであれば、勝つだけでいいのです。たとえば、非常に早口で立論を述べて聞き取ることができないようにし、相手に反論させないという戦法があります。しかし、上で述べたように、ディベート大会への参加だけでなく、市民社会への参加をも果たさなければなりません。それには、社会的な論争問題の解決に向けて、今回は再生可能エネルギーへの転換の問題ですが、問題解決のためのすぐれた議論を重ねる必要があります。すぐれた議論を行うには、立論、反論、総括のスピーチを互いに高め合うように、相手チームと共同しなければなりません。相手が反論しやすいように立論を述べ、相手からの的確な反論を引き出し、さらにそれを上回るかのように再反論して、相手の主張も高く評価しながら総括するような展開です。このようなディベートを求めるので、勝敗だけでなく、試合評価を重視しています。したがって、対立しながらも共同するのがパブリック・ディベートだと再度確認してください。

最後になりましたが、今回の大会も多くの方々からの深いご理解と手厚いご支援をいただき、開催することができことを喜んでおります。心からお礼申し上げ、講評を終えます。